

二次性副甲状腺機能亢進症に対する PTx

— わが国の現況と未来 —

富永芳博

平成 26 年 8 月 23 日/北海道「北海道透析医学会学術講演会」

われわれは、二次性副甲状腺機能亢進症 (SHPT) に対する PTx 研究会 (PSSJ) を設立し、わが国の SHPT に対する PTx の現況を調査するとともに、登録制を導入し、手術症例の術前所見、術所見、術後の予後などを調査してきた。PTx 症例は 2007 年までは増加し、2007 年は年間 1,771 件であったものが 2013 年には 297 件へと著しく減少した。2008 年 1 月よりわが国でも cinacalcet HCL (cinacalcet) が使用可能となったため、症例数の減少を cinacalcet に結びつけて考えがちだが、実はわが国の透析医療の未来を先見している可能性がある。PTx を必要とする症例の平均年齢は 57.1 歳、術前透析期間 144 カ月、糖尿病性腎症は 10.0% であり、わが国の透析患者の特性とは乖離している。確かに、cinacalcet は強力に PTH を抑制するが、同時に SHPT が進行しやすい素地を有した透析患者が減少しつつある、あるいは急速に減少している事に配慮すべきである。

cinacalcet 登場はわが国での SHPT 治療を大きく変革した。cinacalcet 導入前後の SHPT に対する治療の変遷を外科医の立場より概説する。

- ① cinacalcet 登場後、SHPT に対する PTx の件数は劇的に減少したが、cinacalcet に抵抗する症例、PTx を必要とする症例も依然として存在する。それらの症例の検討により、その抵抗性の予測因子を明らかにする事が急務と考えられる。副甲状腺の腫大の程度は有力な要因となる可能性がある。
- ② 結節性過形成に進行すると、超音波検査にて副甲状腺のサイズを測定し結節性過形成の存在を認

識することは、内科的治療の抵抗性を予測する因子であった。cinacalcet でも同様なことが言えるか今後検討の必要性がある。

- ③ cinacalcet 使用によりはたして副甲状腺は退縮するのか、するならばどのような機序なのか、PTH の低下は temporary なのか、退縮も一過性なのか、解明すべき問題である。
- ④ cinacalcet 使用後の副甲状腺では嚢胞性変化、線維化、出血性梗塞等の変化が高頻度にみられ、すべての副甲状腺の確認を困難とし、さらに反回神経の癒着によりその損傷のリスクが高まり、外科医としては困難な手技を強いられる。この観点からも長期予後が望まれる症例では、比較的早期に PTx を考えるべきである。
- ⑤ cost effectiveness の観点からも、PTx は cinacalcet に勝る治療法である。今後、医療経済の立場から PTx の必要性が高まる可能性がある。
- ⑥ PTx に携わる外科医は、副甲状腺の発生、解剖に習熟し、SHPT の病態を十分認識し、どのような状況下でも対応できる技量を維持していくことが重要である。

上述したごとく、わが国の透析患者は急速に高齢化し、原疾患は糖尿病性腎症が半数を占め、当然長期生存は限られる。つまり PTx を必要とするような比較的若年の、長期透析患者は減少することが推測される。また新しい治療薬の出現は新たな局面をもたらすかもしれない。しかしながら、医療経済の観点からは PTx は cost effective な治療である。SHPT に対する PTx は

science から social へと舵を切る時代が待っているの だろうか？

*

*

*